

子どもたちへのゆるぎない信頼

山本さゆり

七月初め、突然届いた後藤竜二先生の訃報に、私は言葉を失った。何かのまちがいで……と何度も疑ったが、それが事実と知った瞬間、心に大きな穴があいた。ぽっかりとあいた穴がうまらないまま、暑い夏の日が続いた。

そんなある日、後藤先生の追悼特集の原稿依頼があった。私などが……、とは思ったが、思い切ってお引き受けた。今は、お世話になった後藤竜二先生の作品をもう一度読み直し、先生の偉大なお仕事について考える機会を与えていただいたことに感謝している。

ここでは、低学年を主人公にした作品を中心に、先生が作品に託した思いを私なりに考えていきたい。

◆ 仲間の中で

後藤竜二先生の低学年向け作品の代表作といえば、もちろん、「1ねん1くみシリーズ」である。このシリーズは、一九八四年に最初の『1ねん1くみ1ばんワル』が出されてから、二〇〇九年の『1ねん1くみ1ばんサイコー!』まで、二十五年間続き、その数は二十五作になっている。

「1ねん1くみシリーズ」の魅力は、なんとと言っても、くろさわ君のハチャメチャさであるが彼を取り巻くクラスメイト、そして担任のしらかわ先生の温かさも欠かせない要素である。後藤作品に共通する「子どもたちは仲間の中でこそ育つ」という理念がここでも太い柱となって貫かれている。

1ねん1くみの子どもたちは、どの子もすてきである。しん君は、もちろん、くろさわ君のよき友達である。いじめられているように見えるが、本人も言うとおり、「いじめられているのではない」。くろさわ君のさびしさやいじっぱりなところもちゃんと分かっている。

こじま君は、一見意地悪で、いやなヤツに見えるが、それだけの子どもなんて、後藤作品には登場しない。何かとくろさわ君をからかったり、嫌みを言ったりしているが、何かあると、実は、心配してくれる。

すっかり者のみずのさん、ユリちゃん、ユーコちゃん、どの子もみんな自分の意見を述べている。くろさわ君に対しても、甘えん坊のあべマリアちゃんに対しても……。学芸会の出し物、おばけやしき作り、そして教室にベッドを